

令和7年度 第2学期始業式 式辞

今日から2学期が始まります。校内で出会う皆さんの表情には、夏休みのそれぞれの経験から得た何かがにじみ出ているように感じられます。

色々なことがあったとは思いますが、まずは、2学期を始められることを、大変有り難く思います。生徒の皆さん、保護者や地域の方々、そして教職員の皆さん、本当にありがとうございます。

さて、夏休みの南高生の活動を振り返ると、全国を舞台に華々しい活躍がありました。インターハイでは、登山部男子が、1位と0.5点差で2年連続の堂々第2位、登山部女子も1位と1点差で10位、弓道男子団体も見事予選リーグを突破し、決勝トーナメントに進み、同じく個人も予選、準決勝を突破し、決勝の4射目まで進みました。全国高文祭では、自然科学部がポスター発表部門で全国4位相当の奨励賞を受賞しました。また、有志が出場したNikkei STEAM シンポジウム 2025では、2つの部門でそれぞれ最優秀賞、優秀賞を受賞しました。他にも、ここでは紹介しきれない多くの活躍がありました。本当に喜ばしいことです。

もちろん、今紹介した、華々しい活躍をした人たちだけが、この夏休みに頑張った訳ではありません。暑い中、一生懸命進路の実現を目指して勉強に取り組んだ人、部活動に燃えた人、探究活動を頑張った人、ボランティア活動に取り組んだ人、いろいろな事情と向き合いながら日々を過ごした人もいるでしょう。それぞれの立場で、それぞれの挑戦をした皆さんを、私は誇りに思います。

中には、その頑張りが思うような結果につながらず、くじけそうになっている人がいるかもしれません。しかし、努力の結果がいつ実を結ぶかは、分かりません。とりあえず、今日やるべきことを、着実にやりましょう。明日も、明後日も、「焦らず、弛まず、怠らず」です。

2、3年生の中には、覚えている人もあるかもしれませんが、私は、昨年度の卒業式の式辞の中で、元メジャーリーガー、イチローさんの日米での野球殿堂入りの話を取り上げました。

今年の夏、そのアメリカの野球殿堂入りの表彰式典が、ニューヨーク州クーパーズタウンで行われ、イチローさんがスピーチをされました。

そのスピーチの中で、イチローさんは、自身が大リーグで達成した数々の記録について、次のように語りました。

「こうした記録は、大リーグでの19シーズンにわたって、毎日小さなことに気を配らないと実現しませんでした。」

「私は毎日、自分のグラブのひもがゆるんでエラーにならないように、洗っていなかったことでスパイクが滑って走塁ミスにならないように、用具の手入れを欠かしてませんでした。」

「レギュラーシーズンが終わっても、私はオフシーズンに厳守していたルーティンがありました。(そのおかげで) スプリングトレーニングに来た時には、肩の状態は既に準備万端でした。」

「小さなことを積み重ねれば可能性は無限です。」

イチローさんの、全てを野球に捧げるかのような姿勢の厳しさは、これまでもよく取り上げられてきました。しかし、メディアを意識したが故に、イチローさんがそのような姿勢を貫いたのではないことは明らかです。

あなたの努力は、誰にも見えていないかもしれませんが、しかし、他の誰かが知らなくても、あなた自身が知っているはずで、陰で努力を続けていれば、いつか必ずよいことがあります。やるべきことを愚直に続けましょう。

もう一つ、イチローさんのスピーチから、唸らされた部分を紹介します。

「チームのためにあなたができる最も大切なことは何かと聞かれたら、私はこう答えます。

自分自身に責任を持つことだと。

それは1日を終えて家に帰ったときに、なぜヒットが出なかったのか、なぜボールをキャッチできなかったのかと自分自身に問いかけることです。

それはピッチャーがすばらしかったからでも、目に砂が入ったからでもありません。

どこかに自分がかつと努力できた点があったからです。

自分に責任を持つことで、チームメイトを支え、手を抜くようなこともしなくなるのです。」

しびれますね。本校登山部のインターハイ2位を紹介した愛媛新聞の記事に、「女子も含め全部員で事前に知識を共有し、控え選手もチームのための

資料や荷物準備に余念がなかった。昨年準優勝した卒業生の寄せ書きタオルも力になった。」と紹介されていたことが思い出されます。

さて、2学期は、運動会、文化祭など大きな行事があります。3年生にとっては、進路決定の重要な時期でもあります。

自分自身や周囲の友達の変化に気づく感度のよいセンサーを身につけて、まずは、いのちを大切に、次に、体調を崩す人がでないように、そして、それぞれの本番をベストコンディションで迎えられるように、気をつけましょう。

反省すべきところがあるという人は、言うまでもありません。今日からリスタートです。

少々遅れても問題はない。スタートするだけだ。必ず走れる。絶対に走りきれぬ。